

# 歌人安江不空

小 野 浩

## 序

ここに「歌人安江不空」と題されましたが、私たちは同じ意味で例へば「歌人茂吉」を語るわけにはゆきません。年少つとに正岡子規に師事し、詠歌清麗と称された不空でしたが、彼の天資は—その秀高にして深邃なる風雅の心は、レッシング風の啓蒙家子規の創作心とは全く異なる出自のものでした。ましてそれが子規同門の高名な誰彼であれ、アララギ派の領袖たちであれ、竹柏園の頭目やその門流であれ、明星派の代表であれ、多磨の同人であれ、凡そ明治から昭和の今日に至るまで（己が道を独往した勇、大無（岡本）、八一、秀雄、順、空穂などもとよりその中に入ります）、詠本来の深处に徹して、ザインの秘邃な消息を、絶妙な言霊の調べにのせて開示し得た点で彼に比肩し得る存在は全くないと思はれるからであります。

それで近代日本詩史上に於ける不空歌業のこの絶類の位置を記述するためには、所謂歌人と称せられる人々の大多数が実は、偽歌人・擬歌人・半歌人・並歌人にすぎぬことを、詳しく具体的実例に即して論評することも必要かと考

へられますが、これは余り愉快な作業ではありませんし、紙面の余裕もないので、割愛させて頂きたいと思ひます。それについて多少の目途をつけようとせらるる各位は、例へば三井甲之の「和歌維新（昭和十七年三月刊）」や、「書齋の中の嗟嘆」に収められた日夏耿之介の「斎藤茂吉君の歌」などを御一読下されば、眼から鱗がとれたやうな感じを抱かれるに違ひありません。とまれ私には、不空は、鎌倉右府をなかにして、遙かに記紀万葉の真正歌人、とりわけ八歌聖▽人麻呂に呼応する存在と稽えられます。元義、東雄、雅澄など、江戸末期の擬古歌人は視圏外に置くとしても、私としては勿論、正徹、定家など王朝風歌人、更に溯つて貫之、躬恒、業平、和泉式部などのことも思はぬでもありません。その風雅の詩情に於ては勿論緊密に呼応するものがありますが、規模の大きさといふ点では格段の相違があるやうに思はれるのであります。実に、本来の意味に於ける詩や歌こそ民族の根源的な言葉であるとすれば、彼の歌業は、日本民族の言葉との運命的なかわり<sup>あかし</sup>を如実に証したものであり、まさにこの点で不空は八歌聖▽人麻呂に緊密に契合するのであります。このやうに稽えてゆくとき、私たちの眼底にはおのづからドイツの詩人ヘルデルリンの面影が揺曳して参ります。人麻呂―不空―ヘルデルリン。まことに民族の歴史的運命への深い責任感のうちに諷詠するといふところに、これら三詩人の *Gemeinsangsgeist* が確認されるとすれば、それもまた道理あることではないでせうか。ところでこのやうな点に指標しつつヘルデルリン詩の解明に身心の力を傾けたのは晩年のハイデッガーでしたが、その強靱にして精緻な思索のあとをたどりながら、これこそまさに不空諷詠の真髓を開示するものと私は思はれたのであります。古語の知識の豊富な貯えをもちながら、これを靈賦する天資を欠くために、徒らに素人を煙に捲くだけで、遂に擬詩人の正体を曝露した釈迦空などとは異つて、<sup>①</sup>不空は古語を活用したのでも駆使したのでもなく、大和言葉が即ち不空であり、不空は即ち大和言葉なのでした。然しこの八存在論的事実性 (*die ontologische Faktizität*)▽は果してどのやうに解明さるべきでせうか。私たちはハイデッガーのヘルデルリン論を手がかりに、ザインと言葉との深密なかかわりあいを見究めてゆくとき、その秘密の一端を仄かに窺ひ得るやうに思ふのであります。

す。

註①

これについては日夏耿之介の次の言葉は注目さるべきであります。「『古代感愛集』のやうな詩は素人の集りにすぎない芸術院が感嘆する程、わたくしは感心しない。古語と古語の近代的使用感覚の間の齟齬に創作的欠陥を相当大きく看取してゐるからである」(『書斎の中の嗟嘆』一六六頁)。また「輓近よく書いた文語の詩は若い小説家たちが感心するやうにはわたくしは感心しない。抒情のデリケートな点にゆるし難い難点があるからだ」(同、一三九頁)。要するに彼は折口信夫として、柳田国男垂流のエトノロークで、土俗学者としての業績に多少みるべきものがあつたと思はれるにすぎません。

一

言葉の起源については諸説まちまちであります、△言霊▽といふ言葉などからも察せられるやうに、私たち日本人は、言葉を神的なものの象徴として、神授のものといふ風に考えてきたやうであります。然しそれが日常の世界で通貨並に使用されてゐるうちに、いつの間にかその神々しさがうすれ、手垢がついたり、使用度のはげしさのために磨滅したりして、本来の姿はすっかり朦朧化されてしまひました。

即ち神氣に飽和された生ける言葉が、日常的な意見や気持の伝達のための、或は真実を歪曲するための単なるメーディウムになり下り、しかもそれだけが言葉の本来の機能と錯覚されたために、簡単なものほど便利だといふので、构子定規の一部官僚と、言葉の精霊に全く無縁な一部国語学者が結託して、この三十年間に私たちの国語をすっかり出鱈目なものにしてしまつたのです。所謂漢字制限、新仮名による整理統合といふものですが、すべては言葉を単なる手段とみるところから来るものでありませう。然し言葉は本来、人間が勝手に処理できる道具ではなく、人間存在の最高の可能性を左右するやうな危険で高貴な財宝であります。近代西欧哲学の致命的な習性になづんで、人間が事物

を対象化し、主体として客体を支配する立場に立つ限り、言葉を操るといふことが、言葉を単なる道具に貶斥する結果になるのは避けられないことでした。実に近代の主体性の形而上学のもとに曝らされて、言葉は殆ど止め度なく、そのエレメントの中からずり落ちてゆきます。「存在自体への関連が破壊されてゐるといふことが、言葉へ私たちの間違つた関係全体に対する本来の根拠であり、」<sup>①</sup>そして、「言葉の運命は存在への一民族のその都度の関連のうちに基礎づけられてゐるのですから、私たちにあって存在への間は言葉への問と最も内面的に絡みあつてゐるでありませう」<sup>②</sup>。主体による客体の支配は「存在忘却 (Seinsvergessenheit)」<sup>③</sup>に由来するとハイデッガーは申します。よつてあるがままの「存在者 Seiendes」に遭遇するためには、人間はまづ日常的主体性の立場を撥無して、存在の光の中へ出てゐなくてはなりません。まことに人間は言葉を操る支配者ではなく、言葉こそ「人間の主 (Herrin des Menschen)」であり、人間がではなく言葉そのものが発言するのであります。私たちが、日々、扱られるやうな想ひでマスコミ報道機関を通じて目に視、耳に聴く言葉のあの急速に蔓延しつつある荒廃は、言葉と人間の真の關係が顛倒されてゐるところから来るのであります。<sup>④</sup>

「言葉は存在の真理の家である」と、ハイデッガーは申しますが、<sup>⑤</sup>本来の意味に於ける人間の思索 (Denken) なるものは、実は人間の自力的はからひに発するものではなく、存在<sup>ザイン</sup>からして催起され、その問ひかけに応ずべきものとして思索させられてゐるのであります。この意味のザインは、人間的な「現存在」<sup>ダフザイン</sup>と切りはなし難く奥深くかわりあつてゐて、デアザインは謂ば森林の間伐帯に差し込むザインの光の中に出て立つ (ek-sistieren) ことに於て自覚的「実存 (Existenz)」なのであります。ところで「言葉が存在の真理の家である」とすれば、このやうな「出 (脱)」自的実存「V」としての人間との關係に於て、「凡そ言葉こそ始めて存在者の明るさの真誰中に立つ可能性を保証する」といふことになりませう。<sup>⑥</sup>しかもそこに於て人間が自的に実存する存在<sup>ザイン</sup>の開明圏が世界 (Welt) であり、<sup>⑦</sup>ザインそのものから生起し、ザインそのものからめぐり合はされる、歴史的運命を私たちがそこで引受けるのもこの世界に於てで

あるとすれば、「言葉のあるところ、そこにのみ世界が、即ち決断と活動、行業と責任、しかしまた恣意と喧騒、頽落と混迷との常住に変転する圏域があり、この世界が力をふるふところ、そこにのみ歴史はある」のであって、一層根源的な意味で宝である言葉がそれを立派に請合っている限り、言葉は人間が歴史的なものとして存在し得る保証を与へてゐるといふことになりませう。<sup>⑧</sup>

註 ①—② Martin Heidegger: <Einführung in die Metaphysik. S. 39>

③ ここで例へば「松のことは松に聴け、竹のことは竹に聴け」といふ芭蕉の言葉が省顧せらるべきでせう。

④ M. Heidegger: <Dichterisch Wohnt Der Mensch……> (<Vorträge und Aufsätze. S. 150>)

⑤・⑦ M. Heidegger: <Brief über den Humanismus (<Wegmarken. S. 150)>。

⑥・⑧ M. Heidegger: <Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung> S. 38

なほ歴史 (Geschichte) 現存在の被投性 (Geworfenheit) に由来する宿命、個体的実存を包越する民族の運命 (Geschick) などの脈絡についての考察には今は深く立ち入らぬことに致します。

## 二

「言葉は存在の真理の家である」——まことに言葉といふ棲家のうちに人間は居を構へてゐるのであります。ハイデガーによれば思索に専心するものと、真の詩作に従ふものとは、ザインを言葉にもたらすものとして、この住居の護持者であり、この両者は、言葉をなかにして極めて緊密な関係にあります。思索と詩作とはそれ自体に於て、言葉が人間を通じて語るところの、初穂的な、本質的な、それゆえに究極的な発言なのであります。<sup>①</sup> かうして哲学及びその思惟は、ひとり詩作とだけその秩序を同じくするのですが、この両者はしかし、決して等しいものではありません。<sup>②</sup> 「詩作と思索、この両者の本質の近さは、決してその差異を閉め出すものではなく、寧ろそれを深淵的な仕方に

於てよみがへらせる」のであり、従って「詩作しつつ発言されたものと、思索しつつ発言されたものとは決して同一等なもの (Das Gleiche) ではない。然し詩作と思索との割れ目が純粹に且つ決定的に口を開けるときなど、とりわけ両者は往々にして同一如のもの (Das Selbe) であり、詩作が秀高で、思索が深到なものであるとき、そのやうなことが生起する」<sup>④</sup>のです。

ところでここに、同一等なもの (Das Gleiche) と同一如なるもの (Das Selbe) についていさゝか註を施して置きましょう。「君子は和して同ぜず」とは論語にみえる有名な言葉ですが、君子をして互に睦和せしむるものは Das Selbe であり、「小人が同じて和せざる」とき、小人輩を雷同せしむるものは Das Gleiche であるであります。「同じて和せざる」道聴塗説の徒が巷に溢れるのを目撃するとき、私たちは、Das Gleiche と Das Selbe との存在論的差異を審さに弁別し得るのではないでせうか。

註 ① M. Heidegger: <Was heißt Denken> S. 87

② M. Heidegger: <Einführung in die Metaphysik> S. 20

③ a. a. o. S. 154

④ a. a. o. S. 8~9

⑤ 論語、子路第十三、「子曰。君子和而不同。小人同而不和也」。

### 三

かくてハイデッガーはさらに「形而上学とは何か」に添へられた「後語 (Nachwort)」を閉づるに当って次のやうに収約します。即ち「存在の声に聴従しつつ思索は、存在の真理がそこから発して、言葉に到達する語 (das Wort)

を、存在のために求める。歴史的人間の言葉がこの語から発源するとき始めて、その言葉は正鵠を得るのである。然しその言葉が正鵠を得てゐるなら、隠微な泉のひめやかな声の保証が言葉にあはせする。存在の思索は語を守護し、そしてこのやうな慎密さのうちでその職責を果す。思索とは言葉の使用に対して心配りをするのである。久しきに亘って守蔵された無言から、またその無言のなかで存在の光を浴みた領域の周到な清澄化から、思索する人の発言が出てくる。詩人の命名(Nennen)も同じ由来のものである。ところで等しいものは、差別あるものとしてのみ、ひとしいものであるから、また然し詩作と思索とは語言の慎密さといふ点で、最も純粹に等しいのであるから、両者はその本質に於て最も遠く別たれてゐるのである。思索者は存在を言挙げする。詩人は聖なるものを命名する(Der Denker setzt das Sein. Der Dichter nennt das Heilige.)<sup>①</sup>と。

遙かに遠くはなれた山上に親しく住んでゐる思索者と詩人との命名Vと命名Vとがどのやうな深淵に隔てられながら、どのやうに親密に呼応しあつてゐるか、それを見究めることは容易ではありませんが、ハイデッガーがここにあげる命名(Nennen)とは、詩人が神々の名を呼び、万物をその本質に従つて名づけることを指示してゐるのです。だが、この命名Vといふことは、もう既に識られたもののために、その名前を調達してやるといふ程度のことを指すものではありません。凡そ詩人とは、本質的な語を発言するものなのですから、この命名Vによつて存在者は始めて本当に指名され、それが本来あるところのものになるのであります。ヘルデルリンは、「常住するものを詩人は建立する(Was bleibt aber, stiften die Dichter)」と記述しましたが、神々並びに事物の本質に建立的に命名することが、詩人本来の職分であるとし、詩人として住む(dichterisch wohnen)とは神々の照臨のもとに立ち、事物の本質的な近みによつて撃たれることに外なりません。ここに塵寰を脱した詩作の営みが、一見いかに無邪気にみえようと、「精霊に憑依されて語つたものは、早く世を去らねばならぬ(Es muß bei zeiten weg, durch wen der Geist geredet.)」<sup>②</sup>といふ極度の危険によつて裏打されてあることの消息が仄かに窺はれるであります。

う。かうしてヘルデルリンは歌ふのであります。

やっぱり私たちには相応しいのだ、詩人たちよ、

神の雷雨のもとに、頭部をあらはにして立つことが、

父なる神の電光を、電光そのものを已が手もて捉え

この天の賜物そのものを歌におさめて

民族に手渡すことが<sup>③</sup>

と。日常の世界から投げ出されてゐるやうにみえる詩人が、粗心な傍観者たちには、遊戯三昧に耽けつてゐるかにみえやうとも、この罪なき外貌が、詩作の営みに必須なること、恰も峡谷の山岳に属するに似たものがあって、そこから始めて、日常現実性を全く取るに足らぬものとする詩の威風は放射されるのであります。

人あるひは、常住なるもの、不易なるものは、一切の手を加へずして常住であり不易であるといふかも知れません。然し<sup>はかな</sup>常住なるものゝこそ、疾くすぎゆくものであり、果敢きものであることを、骨髓に徹して痛感してゐる私たちは、それが常住なるべきことを心から祈念せずにはゐられないのです。そしてこのことは一つにかかつて真醇に詩作する人々の配慮と奉仕とに委ねられることになります。

ところで存在と、事物の本質とは、決して算定され得るものでもなければ、眼前の存在者から演繹され得るものでもないのですから、それは自由に創られ措定され、贈与されねばなりません。ハイデッガーによれば、このやうな自由な贈与が即ち<sup>へ</sup>建立<sup>の</sup>なのであります。神々が根源的に命名され、事物の本質が言葉となることによって―それによつてこそ諸々の事物がはじめて光彩を発するのですが―、一般にそのやうなことが生起することによつて、人間の現存在は確固たる関係のうちへもたらされ、また一個の根底の上に据えられることになります。詩人の発言は、ひとり自由なる贈与の意味に於て<sup>へ</sup>建立<sup>の</sup>であるだけでなく、同時に人間の現存在を、その根底の上へ堅固に築き上げ



るといふ意味に於てもさうなのであります。<sup>④</sup>

ところで生ける民族は、自己が全体としての存在に帰属してゐることを記憶にとどめたものとして、神話伝説を保持して居ります。そしてハイデッガーはこのやうな意味で、至高なるものの追憶たる神話解釈の使命を担ふものとして、詩人を稽えてゐるのであります。彼は申します、「かくて詩の本質は、神々の胸めくばせと民族の声といふ、互に離れあふとともに近づきあふ双つの法則のなかにはめこまれてゐます。詩人自身は前者、即ち神々と、後者、即ち民族との間に立って居ります。詩人とは入投げ出されたもの (Ein Hinausgeworfener)」、即ち神々と人間とのあの中間に投げ出されたものであります」と。<sup>⑤</sup>

従つて神々の胸を己が民族に伝ふべく招命された詩人は、最早単なる私的存在ではあり得ません。抒情詩人がつねに「私は……」と発言するにしても、この入私Vは民族生命の流れから遊離した近代風に抽象的な入自我Vとはいささかもゆかりなきものであります。実にニイチェも言ふやうに、「抒情詩人の自我性は、經驗的に実在的な醒めてゐる人間の自我性と同じものではなく、諸々の事物の根底にやすらえる、凡そ真に存在する永遠な唯一の自我性であり、この自我性の諸々の模写をとほして、抒情詩の天才は事物の根底まで透見する」<sup>⑥</sup>のであります。

各個体は一千年溯れば二千万の血縁者をもつといふル・ボンの算数的思惟に俟つまでもなく、超個の生命に没入随順すれば、いつも私たちは宇宙生命の旋渦に直接するのであり、その明暗交替起伏動静の生命律動は、入機前Vの境に身を置く天才詩人の言霊のしらべに乗って、入存在Vの秘邃なる消息を人間世界へつたへるであります。不空全歌集を通誦したものは、この歌人が神々と人間との間に立って、神々の胸を人間に伝へようとしてゐることを疑ふことはできないのです。「詩作とは根源的に神々の名を呼ぶことである (Dichten ist das ursprüngliche Nennen der Götter)」<sup>⑦</sup>と、ハイデッガーがヘルデルリンに閑説しつつ刻銘するとき、それがそのまま不空の諷詠にもあてはまることに異議をさしはさむ余地はないと思はれます。そしてまた「神々が言葉の中へ来臨されるのは、神々が親しく私

たちに語りかけて私たちに神々の要求を提示されるときにのみ可能である。神々の御名を唱へるその言葉は、いつもこのやうな要求に対する応答なのである。そしてこのやうな応答はその都度、責任を以て運命を引受けるところに発する<sup>⑧</sup>とハイデッガーが語るとき、これもまたまさしく不空諷詠の核心を照射したものであることを、私たちはやがて確かめることが出来るであらう。

註 ① M. Heidegger: <Nachwort zu «Was ist Metaphysik.» (Wegmarken. S. 106~7).

② Aus Hölderlins «Empedokles, Erste Fassung» 1747~8. (Sämtliche Werke 4, S. 73)

③ Aus Hölderlins «Wie Wenn am Feiertage.» 56~60 (S. W. 21. S. 119~20)

④ M. Heidegger: «Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung» S. 41.

⑤ a. a. o. S. 46~7

⑥ Aus Fr. Nietzsches «Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik. S. 5»

⑦ a. a. o. S. 45

⑧ a. a. o. S. 40

#### 四

近代的非近代的な様々な思想や傾向や情念がもつれあひ、からみあひ、ぎくしやくせめぎあつてゐる喧騒を極めた時代のさなかに、この歌者は超時代的に遼古なる宇宙が—あらゆる現実がそこから生み出されてきて、そこへ帰入する宇宙的に永遠な秩序や法則が、日々新たに厳存するといふ照覚を私たちの心の奥深く呼びさします。宇宙的に高次の諸現実を清澄秀高なる魂から放射される言霊に飽和させ、絶妙なしらべにのせて歌ひ出る不空の深邃と神精とに於て、私たちは、単に時代的なものにすぎぬ一切に対する彼の厳しい超絶と高翔とを直観するのであります。つねに

時代の圏外に立つて、それらを俯瞰しつつその全生涯を断送したといふことは、彼の力量の不足を語るものでもなければ、何らかの自力的な思ひあがりによるものでもありません。さう非らざるを得ないこと、それが彼の運命であり、またその存在の宇宙的投錨の証左なのでもありました。実に遼古の日本は生れながらに彼に具ってゐたのであり、歴史的追想や抽象的思惟の迂路を経て彼のもとにやってきたのではありません。彼は単にそれを自覚しきへすればよく、この自覚が彼の場合、或は歌となり、或は画業となるのであります。そこに私たちはヘルデルリンが「多嶋海」を歌ひ、グンドルフがこの詩の根源的なヴィズィオンを私たちに伝へるとき、この両者の心を根底から動かしてゐたのと同じあの「本然の古心」を感じ得致します。このやうな「古心」を以て直観され諷詠された宇宙的諸現実が、いかに深邃にして幽玄であり、優麗にして、しかも勁秀であるか、瑞々しく新鮮なその一首一首について審細に味識さるべきであります。

雪と咲く柑子の花の散るなべに、木綿織を織るうるはしき妹、桑にあさる野鳥のしたしみ深いかげ、吹く風の雪に変わりゆく明日香路の月、真青なる大釣鐘も濡るるほど降りきらふ雨、たぎつ瀬にかかる水車のひびき、青雲の空にはふまで八千華吹きただよはす冬の霜、霜の風に更けゆく夜に、月かげ高く息づく天つ星原、蒼竜のさわやかな水しぶきにこもる遠世のしらべ、一々あげればきりもないことですが、とりわけ、いまはいかに荒れはててみえようと、高山の燠、短山の燠にいまなほ森然と鎮まり、古式豊かな祭祀をたやさぬ古社の神さびたかげ、雲の梯をつたって昇降する神々の訪れをうけて波濤のやうに起伏する山脈の姿、それらは記紀の世に於けると等しく、生ける宇宙的現実として、不空歌集のなかに、言葉に於ける単なる形容としてではなく、さながらに瑞々しく息づいてゐますが、その典雅清尚、雄渾壯重なしらべは、永遠の現在性を以て、私たちの心を捉えて放さぬ威力を放射するのであります。それが歌のしらべに乗った一種の祝詞に近づいてゆくことを、彼の歌友花田比露思（歌誌「あけび」を主宰す。子規没後の門人）は実地的確に指摘しました、即ち「……病気のため耳こそ遠くなられたが、記憶力抜群で、よく古事や古語に通

じ、それらの古語を縦横に駆使して詠まるる歌は、往々万葉以前の歌を思はしめ、その詞は、人と人とを結ぶことばと言はむより、寧ろ神と人とを繋ぐ祝詞の言葉を思はしむるものがあつた。かかる歌を詠まるる大人は、その性情おのづから清純にして高潔、世俗を離れ、固より名利の念などなく、神さびて居られたと言つてもいいであらう……」<sup>①</sup>

と。また門下高足の一人原真弓も記すのであります。「住吉のほとりの幣垣内ぬさかきのうち（住吉神社境内）に閑居して天下を睥睨して居られた隠士安江不空大人は、厳格な態度で短歌の真髓と長歌道の本格とを教へ且つ鍛へられた。鮮烈なる言霊の道と、躍動する古語の生命を、諄々として説かれた遠き日の懐しさよ。大人の家居せらるるや天下茶屋山松橋畔の無憂樹林に於ても、粉浜の幣垣内に於ても、常にしめ縄を玄関入口に結び廻されてゐた。その風貌に接してゐると時に春日の如く暖い微笑を漏らされたものである。しかし又一面には、言々句々峻厳、秋霜烈日の概があつた。大人は好んで明治以前を語られた。特に神代を論じ、最も得意とする飛鳥奈良朝時代を語られるとき、大人の眼光は炯々として光を発する程であつた。……大人は刀剣を愛し、古玩を弄し、よくこれを鑑定する超凡的能力をもつ。大人の清室すがむろは古代的雰囲氣の豊かさに於て上代貴族の室を思はすものがあつた。常に第一級の茶器、印石、筆墨、古硯、唐紙、煙具の類を座右に置いて上菓を摘み、茗香を喫して居られた。

大人の作歌について言ふと、その上等作品は上代の神品に迫り、或ひはこれを凌ぐものがある。その作る長歌は、古語にさながらの生命を与へて縦横無礙にこれを駆使し、その字句幹旋の自在にして絶妙なる、堂々古今に冠絶して、天下真に第一等である。……換言すれば大人の長歌は天品にして神意の表現せられたるものとなすも過言ではない。人麻呂をして大人に直面せしめんか、長歌道に於てまさ応に大人に一步譲るべしとは、久しきに亙る門末真弓の信念でもあつた云々」<sup>②</sup>と。

人或は門弟なるがゆゑの溢美の言と思はれるかも知れませんが、全歌集について彼の長歌を精誦せらるれば、この言挙げの正当なることを心悟せられるであります。「詩作とは本源的に神々の御名を呼ぶことである」といふことを

証した歌者は、日本に於ては人麻呂と不空、ドイツではヘルデルリンで、この三人こそ、まさに歌人中の歌人、詩人のなかの詩人と仰がるべきであります。漢詩人、福島蒼海もここに加へてもよろしいかと思はれます。彼が李白や杜甫と異るのは、或はヘルデルリンがゲーテと異なるやうなものであったかも知れません。とまれ不空自身、メモの歌帖を「斎種」と命名してゐたところから稽えれば、歌を神と人とを結ぶ祝詞の一種とみてゐたことは明かです。人麻呂以後に於て遼古の大和言葉を護持し、これに新たな生命を与へた第一人者はまさに不空であり、この意味で大和言葉の新たな創造者となつた不空と、寧ろ真の言葉の破壊者であつた所謂近代歌人と称せられる人々を並列的に語るわけにはゆかないのであります。彼等が真の言葉に對面し得るためには世紀末的に頹廢的な一切の近代性を蕩尽して、生れかはらねばなりません。それとともに、豊かな天資にも恵まれてゐなければならぬでせう。「言語創造は魂の更生を前提とする。よつてあらゆる宗教的天才は言語創造者である。そしてすべての言語創造は、直接に宗教的衝動から由来せざるものも、清祓の性格を帯びてゐる。詩歌本来の象徴たる韻文は祝詞的にして魔術的であつた。……言語創造の行為としての真醇の詩歌は必然的に壮重である。ゲーテの最も輕快な恋の歌やアイスキュロスのプロメーテイスも同様に言祝ぎである。ゲオルゲのひどく嘲笑された壮重は、彼が、言語創造の更生的性格に對する湮滅した感情とともに、韻文の壮重さをも更新したことを意味する……壮重ならぬ詩人は、属僚的支配者性と全くひとしくそれ自身に於て矛盾である。ゲオルゲの壮重が著しく人目に立つならば、それは彼が特に言祝ぎなき時代から際立つてゐること、そして次に、彼が以前の諸時代の詩人たちよりも一層独占的にまた一層容赦なく、彼の言語創造者の職務を執行するのによるものである。なぜならまさに——あらゆる階級の——賤民たちが容喙し、そして言語を濫用することが多ければ多いほど、詩人自身は益々言語の品位に重きを置かなければならない。これだけは確かである、この世界が存立してより以来、言葉が今日ほど大衆的に、愚かしく、輕薄に濫用されたことは決してない。賤民はつねに存在してゐたし、また存在せねばならぬでもあらう。けれども彼が今日ほど發言權を獲得したことは曾てなかつた。

た」と、大才フリードリヒ・グンドルフは、その師シュテファン・ゲオルゲを記述した一文「現代に於けるシュテファン・ゲオルゲ (Stefan George in unserer Zeit)」に於て語つてゐますが、これはそのまま、不空歌業の心核を照射したものだと言つてよいのではないでせうか。

註 ①②「安江不空全集(住吉大社版)」序文類より。

③ Friedrich Gundolf: 《Dichter und Helden》S. 66~7

## 五

かうして言祝ぎとしてのこの歌人の歌は、その根源的な魂の自らなる律動であり、天然の流露であつて、歴史的追想や思想的反省を媒介として構成された人為の産物ではなく、真に遼古の宇宙的空間から自らにして放射された内面的視影を伝えるものであります。そこに詠はれるものは、遼古にしてしかもつねに新たなるへ永遠であり、ひとたび去つてまた帰ることなき盛代への浪漫的憧憬でも、過去との対比に於て現在に絶望する懐古家の感傷でもありません。浪漫派風の詩人たちとは全く無縁な彼を、一切の浪漫的なものから截別するものは、実にその古道精神なのであります。いかに深処にひそもうとも、古神道こそ日本の真の源流として、いまでも流れたえせぬといふことが、彼のゆるぎなき信仰であり、最深の体感でありました。しかし凡そ信仰の証明し得ぬものであることは彼もよく心得てゐたでありませう。それでこそ彼は歌つたのであり、画いたのであります。いまは廢語と目される数々の古語が、いかに瑞々しい生命に溢れて優婉な節奏をかなでてゐるかを、身を以て証知するとき、私たちはそれが、古歌の一応成功した模倣などではなく、水到つて渠自ら成る底の必至の流露であつたことを感ずるのであります。人麻呂のエピゴオ

ネがではなく、その僚友にして始めてこのやうに歌ふことができたでありませう。不空の古代風に根源的律動は、内から外へ溢れ出る原理念ウルイデニであり原視影ウルサイズイオンであつて、外から内へ強引に仕込まれたお粗末な拵えものではなかったのであります。へかなVをへかもVに改めてみたところで、すぐ万葉調の秀歌に生れかはるわけのものでもありますまい。

## 六

ここでは、へ歌人、不空Vについて語りましたが、この限定は決して不空の部分的局限を意味するものではありません。彼の真髓が、そこに於て最も美事に開花してゐるといふだけでなく、凡そ詩歌こそ最も根源的な意味で芸術の圏域であるとの見地も含まれてゐたのです。蓋し言語芸術はその律動に於て音芸術の、花鳥山水への直観を封印する意味で造形芸術の要素を自明的に含むからであります。然し絵画的直観の方面でも俊抜な天賦を示し、画家として立たむとして、美術学校入学を志望したほどの彼について一言も触れぬわけにはゆきません。

文部省は最初、彼の極度の難聴のゆゑを以てその入学を拒否したのですが、不空の天資を惜んだ岡倉天心は、再三当局と折衝して、異例の学科試験を行つてもらひましたところ、成績拔群でしたから、美校選科二年に編入されました。明治三十年、不空十八歳のことであります。そして翌三十一年、美校騒動のため辞職して、橋本雅邦らとともに美術院を創設した天心に従つて不空は僚友野田九浦（故人、芸術院会員、その名作「辻説法」は近代博物館に収蔵さる）とともに美術院に移りましたが、当時、同院には、大観、観山、春草らが駢馳して名筆をふるつてゐたわけで、その壮観は思ひやられるでありませう。不空は一時、先輩寺崎広業のもとに寄寓してゐたことがありましたが、不空の実力に敬意を表した広業は、同輩として交際しようと申入れたと伝へられます。ところで前記の野田九浦は次のやうに記して居ります、「美術院当時、二ヶ月に一回位の割合で、日本画研究生の研究会が開かれました。毎回、各研究生が

提出した作品を前にして、橋本雅邦先生から、厳正にして仮借なき批判が下されたものです。その度毎に不空大人の作品は、他を圧して、常に一等又は二等に抽かれてをりました。不空大人が、その作品『水辺の塔』や『寒流』等で特別の好成績を取られたことは、六十年後の今日と雖も、不思議に忘れ難い思ひ出となって、私の脳裡に、深く印象されてゐます<sup>①</sup>と。

大正二年、大阪を去ってから再び不空にまみえる機をもたなかった九浦は、その後、全く不空の画業に接することにはなかったやうです。生存中、自らの手では一卷の歌集の公刊も行はなかった不空は、画家につきものの個展など全く開かうともせず、画壇とも没交渉にすごしたのでありますが、生涯画筆を放さなかった彼は——今日、その画業の大半が行方不明になったとは言へ——なほ数々の大作名作を残して居り、没後十六年の本年一卷の大冊として上梓されようとして居ります。青年期には天心の奨めにより雪舟の研究に没頭したやうですが、やがて漢唐の古画を始め、宋元明清の諸大家を領略、また大和絵の真髓を完全に消化し、さらに令嚴の親友にして幼時愛撫をうけた富岡鉄斎の筆意にも学び、晩年には鉄斎が悠々と滞留した——停滞ではありません——かの八瀛洲僊境Vのやうな世界をさらに超えた成層圈的次元に呼吸したやうにさえ思はれます。

次に書について申しますと、耳順期の墨跡は、六朝書道の骨法を消化しつくして濶達雄宏、不折はこの不空書道に学んだと言はれます。六七十台に於ては平安朝風の草仮名の優麗高雅を完全に藁籠中のものとし、八十に入れば、まことに水の流るる如く、野面を吹き互る風の如く、雲の太空をゆくが如く、無礙自在、神仙味を帯びて、一塵の濁りなく、深到清尚、独自の不空書道を現成しました。しかもさらに篆刻まで手がけてゐるのですから、その大きさは、全くはかり知れないものがあります。然しこのやうな悠々たる彼の行蔵は、決して有り余る豊けさのうちに達成されたわけではありません。いかに峻厳な運命に彼が耐えたか、原真弓の年譜によっても略々窺ひ得るかと思はれるのであります。まことに厳しい天命に随順して、何らの嗟嘆も呪咀も知らず、八国のまほろば、うるはしき大和Vの真の歌



者として、永遠にして邃古なる大和民族の神火を、明治・大正・昭和三代の同胞たちのために保衛し、またそれを永く後昆につたへるといふ絶類の使命を成就し、謂はば謫仙としての任務を達成し、悠然として地上から脱去したその消息の一端を、人はやがて刊行される書画集からも、鮮晶に直観し得るであります。

おほぞら 蒼穹のはたて知られず歌聖絵書の聖兼ねさせ給へば

人麻呂に並び立たすと刻るすとも誰か斥すべきその言挙を

大和民族のいのちの奥<sup>おく</sup>処<sup>が</sup>ゆびき出づるみ歌のしらべは清<sup>さや</sup>けきものか

歌仙絵のこの丹青も軽々と爽やかなれや春陽<sup>はるひ</sup>に映えて

(拙詠「不空頌」より)

註 ①「不空全歌集」序文より。

七

以上を以て八歌人安江不空V論を一応了りますが、晩年の詠のうちから御参考のために数十首を抽出しておきませう。

熊野山下

くまのがはななすの浮沙<sup>うき</sup>のしららとゆきのみしろしひのくれゆけば  
やまそばはゆふさりくらししばしばもしづるるゆきにぬれつつぞゆく

やまおろしゆふつのりきてはてもなしひばらはりばらゆきになりゆく  
みゆきつむくまのもろねのやまがたをなびきさわたりくもたちのぼる  
よもすがらふりつむゆきにうづもれていよよしづけしやまのしたやは

## 南大和

まきもくのあなしのくずはおどろなりひさしくふかずふるさとのかせ  
淇ににたるみづはあれどもみよしぬのかみのみやたき木根立ふがし  
うれたかきかきのもみぢのえだすきてみるがよろしきたかとりはやま  
やまのやのつきさゆるにはよをこめてつきしもちかもきねもとどろに  
むかしわがともの左千夫もかくのごともちひくひつつうたよみつぎし  
しるしなきことはおもはずやまのやにもちくふひとひひじりさぶがね  
八桑枝のきばみあかるきをはたのくろにおりきてあゆむやまどり

## 散木抄

雪と咲く柑子<sup>かうじ</sup>のはなのちるなべにふゆ機<sup>はた</sup>おれり赤坂<sup>こさか</sup>の妹は  
かぎろひのゆふやまいまだしらじらと柑子のはなは目にしるきかも  
水きよしかきねいづれば香草あり柑子のはなのたえずながるる  
たにがはの水車のひびきあはゆきと柑子花ちるたぎつせのうへに

(以上、昭和廿四年、「暢玄抄」より)

ふくかぜは雪にかはりて明日香路のゆふざり月のかげうすらけし  
美狭々城をいくつをろがみうすづきのかげさすころをあすか路に入る

ここにきて人のふまねば美狭々城の松下かげは草もえのよき

美狭々城の真うへにうかぶしら雲をあめのみかさとおもひけるかな（飛鳥）

たかくらの御蓋あからみさしのぼる月のひかりにあくがれにけり

山かげのうけらが花のそよりくれかかりたる白檣の村

くれなづむ寧楽のはざまにほのじろくさけるあしびを見つつしもとな

神垣外の五百枝の樟にみかさ召す月読くもり雪ふりにけり

（昭和廿五年）

### 青空抄その他

荒檣をよこはしりして降る霞土師の里わの春はいまだし

水霜のしたたりやまぬ庭樹々にうすきゆふ陽はなほのこりをり

霜の風夜くだち月のかげたかし息するものはあまつ星原

青雲のそらにはふまで冬の神霜の八千華吹きただよはす

佐備の隈肥の隈川の葉柳のそよぎはてなし秋風吹くに

桑にあさる野鳥のかげもしたしげに春たつ空の雲のしづけさ

月いまだ星かげうすしふちはらの御井のあたりゆきりたちわたる

樞原のみやの大路はなつたけてしげりこぶかし桜なみきの

つゆしげきゆふさり月のかげしろしかぜにそよげるやまの麻畑  
島のみやあまつ磐座きよめふるあさけのあめは陽にきらきらし

(昭和廿六年)

由布襷より

松のうれもるる朝陽とところうす霜みゆるみちのいつしば  
よろしなべ松の間にみるくれなるの照葉ひややかに入日映えたり  
春たちてなぬかといふにまさやかに笹にのこる霜のしら菊  
つるしたる牛の鼻かご紅梅の一枝いけつわがむろの春  
ゆふしでとあは雪かかる八つ手葉に羽振はげしき朝の宇具比須  
しもしろき菜くづにまじりひそましくけさも来居るはひたき鳥かも

御食津国原

雪の上にあさ飼のけぶりなびきあひて、稔のゆたけき御食津国原  
雪ふかく降りうづみたる田廬にも天照す神のみかげあまねし  
あめ牛の背ぬらすほどに降るしぐれ信貴の畝峽は片かげりせり  
はらはらと桜もみちにふるしぐれ夕山宮の神牆いてらす  
夕くだる山路は月のかげ昏しうすき時雨に袖しををなり  
さえさえし信貴が嶺風吹きたえて草香の盾津雪になりゆく

霜にあきて咲きこぼれたる山茶花の白く流るる泉の末に  
並<sup>よろ</sup>甲<sup>を</sup>ふ松の間に見る向<sup>む</sup>つ丘<sup>を</sup>の八<sup>や</sup>汐<sup>し</sup>紅葉<sup>もみぢ</sup>に伊<sup>い</sup>保<sup>ほ</sup>利<sup>り</sup>うする  
うら枯<sup>く</sup>のあら草中<sup>くさな中</sup>のたまり水<sup>みづ</sup>ここにもすめる空<sup>そら</sup>の真<sup>ま</sup>青<sup>あお</sup>の  
神<sup>みくま</sup>奠<sup>でん</sup>にはかもしし神<sup>み</sup>酒<sup>き</sup>をささぐべき国<sup>くに</sup>の秋<sup>あき</sup>かも甕<sup>みか</sup>のへならぶ

(昭和三十年)

以下後期の歌もあげればきりがありません。もとより出発に於て清麗なりし彼の諷詠は、前期・中期にも幾多の秀歌を残して居ります。そのためには彼の「全歌集」(昭和卅九年刊行)を通誦して頂かねばなりません、これは既に絶版になって居ります。増補再版の日の来ることを心から期待したいと思います。

(昭和五十年八月二十七日稿)